

真殿先生から学んだこと

大学事務局副部長
長谷川 善仁

私が真殿達先生と関わりを持つようになったのは、2006年4月に先生がキャリアセンター長に就任されてからだ。以来、キャリアセンターの上司・部下の関係が2014年3月まで続き、その後も今日まで、キャリアセンターのよきアドバイザーとして師事し続けてきた。今となっては、私が入職した2003年4月からセンター長就任が決まるまでに、一度たりともコミュニケーションの機会がなかった方とはとても思えない。

ご勇退にあたり、本来であれば、先生が本学経済学部で担当なさった主要科目「日本経済論」「現代金融論」をはじめとした主な講義での様子や、様々な研究成果に触れながら、先生のご功績について述べるべきではないかと思うのだが、先生と私との関係に免じて、ここではキャリアセンターで私が先生から学んだことについて書き綴らせていただくことにする。

先生との関わりは、日々の雑談の中にも新しい学びの連続であり、極々一般的な大学職員では知ることも見ることなかったと思われる世界をたくさん聴かせて、見せて、学ばせていただいた。それらについて挙げようとすれば取り留めもなく、枚挙にいとまがない。

そこで、ここでは三つのキーワードに的を絞って、真殿先生から学んだことをまとめてみたい。そのキーワードは、「慈愛の深さ」と「人脈」と「自然体」である。

1. 慈愛の深さ

先生は、実業界での豊富なビジネスの経験や国際経験に基づいて、常に大局から物事を捉え、10年先、20年先を見据えておられた。大学の行く末を念頭に、キャリアセンターの大きな舵取りだけでなく、日常的な業務の判断についても同様であった。その最たる例が、学生への接し方である。

先生は、学生に対して常に「親心」で接しておられた。昔気質の厳しい父親をイメージしていただくとよいのかもしれない。普通の大人であれば見逃し放置してしまいそうなことでも、目の前の学生の10年後20年後の人生に悪影響を及ぼすと思うようなことについては、厳しく対処された。その姿勢、態度は一貫しており、決して揺らぐことはなかった。だからこそ、学生はきっと心の奥深いところにある「慈愛の深さ」を察知するのであろう。経済学部求真ゼミは、常に学生に一二を争う人気のあるゼミであった。

「慈愛の深さ」は、学生に対してだけのものではなかった。私たちキャリアセンター職員も、先生の親心のおかげで、随分と成長することができたと思う。とりわけ、キャリアセンターとしての最初のミッションである「キャリア教育科目の新設」にあたっては、教員と職員という大学界にありがちな壁はなく、大学や学生の就職力を高めるためには、どのようなプログラムや学びが必要で、課外活動や同窓会組織ではどのような校風を涵養すべきか、先生を中心にセンタースタッフが一丸となって考え尽くした。そのような過程の中で、一人ひとりの職員をどのように育成し、どのようなチームを作り上げていくべきか、を同時に考えておられたのが真殿先生であった。

また、家族に関する会話が多かったことも極めて印象深い。「その後、お嬢さんはどう？ 元気に学校へ通っているの？」など、一度しか会ったことのない私の長女の近況を、しばしば気に掛けてくださっていた。これが私だけでなく、他の職員にまで及んでいる様子を傍から見て、自分もかくありたいと何度も思った。

2. 人脈

「人脈」とはこういうものなのか、このように使うべきものなのか、と強く実感させてくださったのも真殿先生であった。政・官・財と、グローバルに張り巡らされた先生の人脈はとてつもない。詳しくはコメントすべきではないと思うが、大学の職員という立場の私から見ると、領域も桁も雲泥の差である。それくらい多くの人に会い、会った相手を見極めるということ積み重ねてこられた証拠なのだと思う。

しかも先生は、ご自身のネットワークを、他者のために惜しみなく活用された。喜んで仲介役となり人と人を繋いでおられた。そのお姿は、私自身の最大の目標となっている。もちろん、私には、先生のような超一流の経済人との人脈は作りようもないが、人脈というものは他人のために活かしてこそ、初めて自分自身の財産となり、ひいては自分に返ってくるということを傍で学んだ。

真殿先生の人脈の活かし方を私なりに真似事でも実践すると、これが実に楽しい。人の繋がりがどんどんと広がり、困ったとき、情報が欲しいときに相談

する相手もできるようになった。誰かいたら紹介してくれないかという声が卒業生や企業の人事担当者からも届くようになった。この「人脈」に対する感覚は、私にとって極めて貴重な財産となっている。

3. 自然体

真殿先生が卒業生への^{はなむけ} 饒 の言葉としてしばしば使っておられるのが「自然体」という言葉である。キャリア教育科目の講義でも、これから面接に臨もうとしている学生たちにも、数え切れないほどこの言葉を投げかけておられた。「自然体」は、私が見てきた先生の生き方そのものである。

学生たち、または卒業生たちに向けられた言葉ではあったが、先生と出会ってからは、私自身も困難にぶつかる度に「自然体」を自分に言い聞かせてきた。まさに私にとっての「座右の銘」であり、今後の人生においても何度も私を支えてくれるに違いない。

真殿先生のように、^{あまね} 遍く多くの人に対して、自然に、慈愛の深い接し方ができる人間になれるよう、私も精進を続けていきたい。

これまで自らの行動で私たちに人生の道標を示してくださった真殿先生に、衷心からの感謝を申し上げますと共に、これからも末永いご指導をお願い申し上げます、結びとしたい。